

(1)日本寺建設の動機

世界が複雑な国際情勢の仲にあった昭和 38 年当時、これを憂い、インドに於ける釈尊の仏教の復活を願う日本仏教徒有志によって結成された仏跡巡拝団(団長:水野隆樹・華頂短期大学学長=当時)が同年 1 月、日本を出発、およそ 1 ヶ月を掛けて東南アジア仏教各国からインドに及ぶ調査巡礼を敢行。最終目的地である釈尊御成道の聖跡ブッダガヤに至り、改めて「釈尊以来 2600 年の仏恩に報いるため日本仏教徒は何をなすべきか」が話し合われた。近代インドが約 400 年に及ぶ植民地の軛に抗い、独立を遂げた 1947 年から数えて 16 年目を迎えた 1963 年のことである。

折りから、名実ともにインド独立の指導者であった、当時のジャワハル・ラル・ネルー初代インド首相は、世界大戦が終わりインドが独立を得て後も平穏を得ることのない内外の情勢を憂い、国是たるマハトマ・ガンディーの教え「宗教の融和による平和の実現」の拠点としてのブッダガヤ復興国際化計画のプラン中であったことから、同年 10 月、橋本凝胤師、松久保秀胤師、巖谷勝雄師ら志しを同じくする 3 師が同首相をインドに訪問。ブッダガヤに仏徳讃仰のための宝篋印塔ならびに日本寺建設用地の提供と協力を依頼すると、同首相は協力を約し、さっそくビハール州政府にその実現のための検討を指示された。これを以てブッダガヤ日本寺建設が現実化する第一歩となったのである。一方ビハール州政府では、国の特別史跡として釈尊成道の聖跡ブッダガヤ・マハーボデイ・テンプル(大菩提根本精舎=大塔寺域)の管理を委託された教育省考古局を中心に、ネルー復興プラン具体化案を策定中のことであり、前述の巡礼団ブッダガヤ初到着 3 ヶ月後の 38 年(1963)5 月の州議会に『ブッダガヤ開発総合計画:ブッダガヤ・デベロップメント・マスター・プラン』が上程されていたが、これに 2 年を掛けて修正を加えたのち、1965 年の州議会承認通過に至っている(1975 年、大塔は州政府観光局に移管された)。

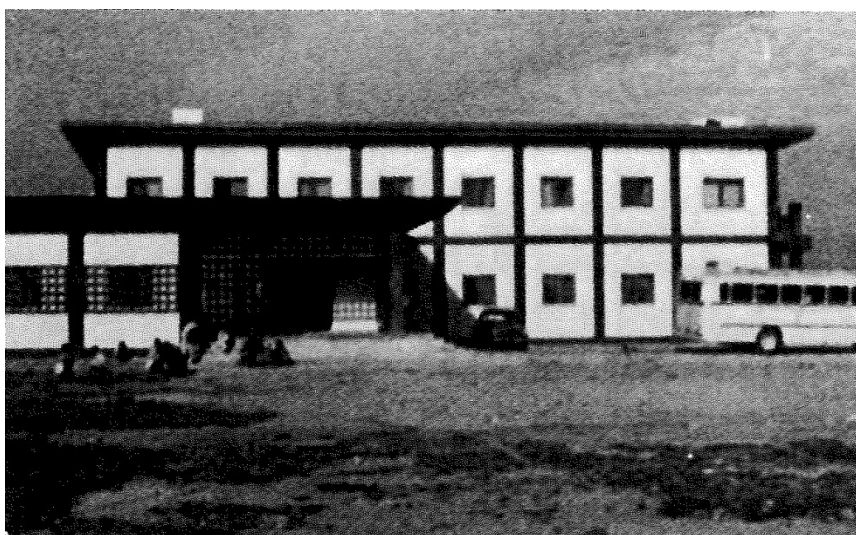
それ以降の経緯は別掲の年表に譲るが、こうした時宜を得た状況の一气呵成はまさに天啓、釈尊のお計らい以外には考えられない。



ブッダガヤの高さ 53m の大塔に朝日が照り多くの巡拝者を迎える。



昭和 42 年 11 月、インド・ブッダガヤに日本寺建設用地決定。背後に大塔が眺望できる。



昭和 45 年 2 月日本寺敷地内に国際仏教会館落慶



昭和 47 年 11 月本堂工事が順調に進み翌年 12 月、全日仏会長佐藤泰舜猊下、インドの V.V.ギリ大統領を招いて盛大な落慶法要が行われた。

印度山日本寺が所在する、ビハール州・ガヤ県・ブダガヤ区・マスティプール村は、南伝(中部)聖求経によれば古名ウルヴェーラのセーナ村と呼称された地域である。仏伝ではウルヴェーラ・カシャーパ(優楼頻迦葉)尊者の地として知られているが、現在ウルヴェーラ村は尼蓮禅河べりの村落名として残り、その西隣がモチャリダ村、そして西に日本寺の建つマスティプール村と連なっている。

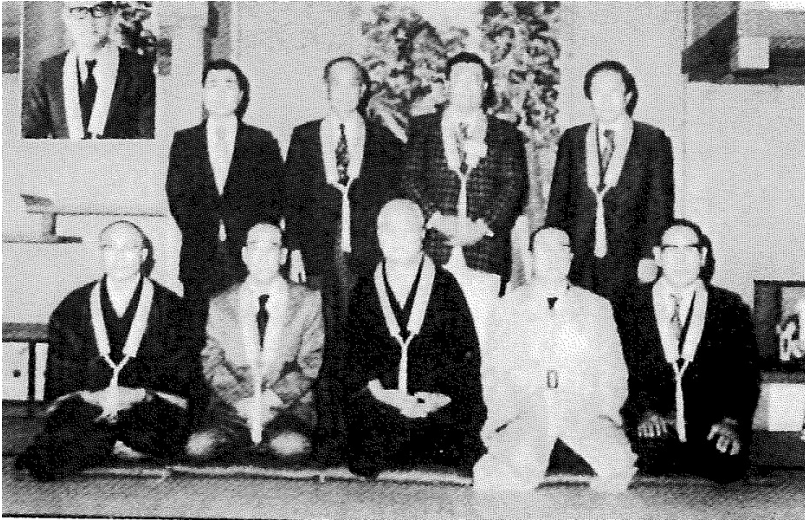
御成道直前の、苦行を捨てられた釈尊が痩せ衰えたお体を急流に逆らってようやく渡り終えたご上陸地点とされる尼蓮禅河べりから日本寺までは直線距離でおおよそ 700 メートルという地理的特長から、日本寺周辺はあまたの仏跡に満ちている。



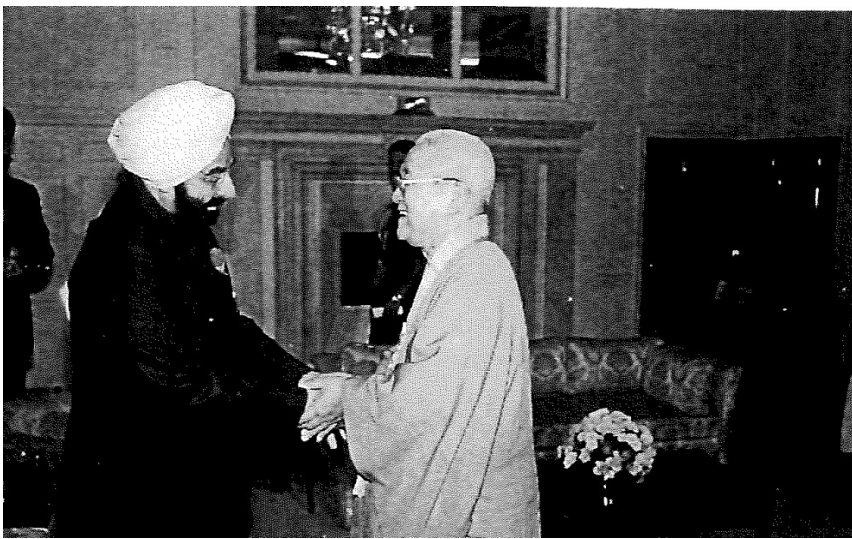
当協会が財団法人設立認可を受けた。(昭和 43 年 11 月)



挨拶されるインディラ・ガンジー首相。(財) 日本仏教会と当協会共催の歓迎会 (横浜・鶴見、總持寺)



(財)国際仏教興隆協会発足当初の事務局。



インド大統領ギャニ・ザイル・シン閣下を巖谷勝雄初代理事長が表敬訪問。

聖跡・金剛宝座の根本大塔はいうまでもないが、寺城南端のアショーカ王石柱の建つ脇に満面の蓮の花をたたえたモチヤリンダ池は、釈尊成道に日陰をかざしてお仕えしたという竜王モチヤリンダの池。そして大塔東側のほどない距離に流れる尼蓮禪河を渡った河の中州にあるチベット名・ロトゥックカワと現地で呼称されるバックロールは、釈尊が御成道前の6年(ロトゥック)の苦行を過ごされた歴史に名高い苦行林の場所。そのまま中州を北に進むことおよそ1キロで、村娘スジャータが乳粥を捧げた地;スジャーータクッティ。ここは考古局調査により、この故事を祠った仏跡とされる古代レンガ造りによるマウント(丘)が発掘されている。その脇300メートル北に前正覚山(プラーグボディ=現地名ドゥンケシュエリー)。御成道直前の釈尊が、ここを成道の地と定めて跏趺座され、深い瞑想に入られようとしたところ、梵王が出現し「ここで金剛の悟りを得られたのでは、その堅さのために大地が裂けます。あなた様の金剛宝座にふさわしい場所は…」として現在のブッダガヤの菩提樹下の場所を示し、釈尊はこれに従うことによってブッダガヤで無上甚深の大悟を得られる。そのいきさつの伝承は、玄奘三蔵法師「大唐西域記」にもある。

そしてその対岸ファルグ河(尼蓮禪河)の向こうに、象が鼻を伸ばして跪ずいた形そのままの象頭山(ガヤ・シーサ)。仏伝に「燃火の教え」で名高いばかりでなく、また仏敵提婆達多(デーヴァダッタ)が、釈迦教団に背いて僧500を率い離反を計って立てこもり、これに失敗して落胆のあまり血を吐き、(パーリ律蔵南伝・四)遂には死に至ったという。しかし、デーヴァダッタを偉大視した教団もあって、山頂には祠が祠られている。

また象頭山の東およそ500メートルには、ヒンドゥー教の最高神ヴィシュヌが自ら髪を切って出家し

た場所(チベット訳仏伝には、釈尊もこれに習い、「我を得度するに应しき師なし」として自度された、記述)として名高く、また先祖(ピトリ)供養の盆行事(ピンダ・ダーン)の発祥の地としてヒンドゥー最高の聖地とされるヴィシュヌ・パド寺。悪魔の地ガヤは、このヴィシュヌ神によって清められたというところから古名をヴィシュヌ・ガヤと呼ぶようになった、と言われている。

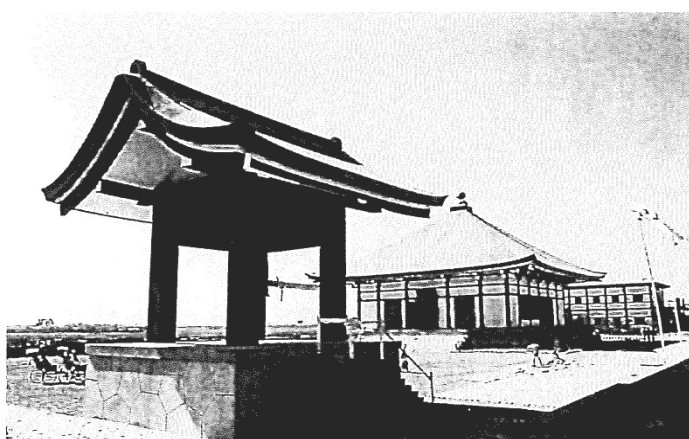
インド国鉄・ガヤ駅は、ここから約3キロ。人口60万の巡礼都市ガヤの玄関口であり、西部鉄道(イースタン・レイルウェイ)の拠点として重要な位置にあるガヤ駅から、カルカッタまで東に458キロ。ベナレスを通過してニュー・デリーまでは西に984キロの距離。チャンドラ、グプタのアショーカ王朝時の統一インドの首都パトナまでは北に向かう鉄道で91キロ。途中ガヤ駅から2つ目のベラ駅で下車すれば、史上最古の仏教僧院であるバラバル丘に近く(この石窟僧院跡はE.Mフォスターの小説「インドへの道」の舞台として名高い)、この丘を降りて東に30キロの道でナーランダに至る。

視点をブッダガヤに戻すと、大塔域内には釈尊を慕いここで修行し、釈尊の悟りを踏襲して遂には釈尊の真諦に至ったという祖師のうちの、無着(アサンガ)廟とされるものが大塔南側に、そして竜樹(ナーガールジュナ)廟、世親(ヴァスバンドゥ)廟とされるものが大塔北側に並び、とりわけ中観・唯識を大事とするチベット仏教徒の尊崇を集め、巡礼の時期には香と灯明がひきもきらない。

そして、大塔を出て西進し、チベット寺、大菩提会寺から約500メートルで、タイ国立寺、ブータン国立寺に並んで印度山日本寺にたどり着く。この日本寺から南に直線で約30キロの地点に、原始密教発祥の地として知られ、アティーシャ尊者、シャンタラクシタ尊者らが修行をしたといわれるコレシュリー僧院跡があるが、ここに僧院の設けられた理由は、この地が仏伝に謂う耕田(カーシカ)バラモンの領地であったとされ、釈尊がブッダガヤで成道されたのち、初めての法輪を転ずべくベナレスに向かわれる途路に立ち寄られ、ここから山地伝いにベナレスに向かわれた記念すべき場所とされる故でもあろう。

しかし、地理的にみれば、ブッダガヤは、太陽が直射してくる北回歸線の直下にあり、事実1971年の干越時、ガヤ飛行場の航空気象測候所は百葉箱内で67.5℃という、インド気温観測史上の全インド最高温度を記録している。冬には3℃まで落ち込むこの過酷な土地が、釈尊にとって成道のための最高の場であった理由は何なのだろうか？

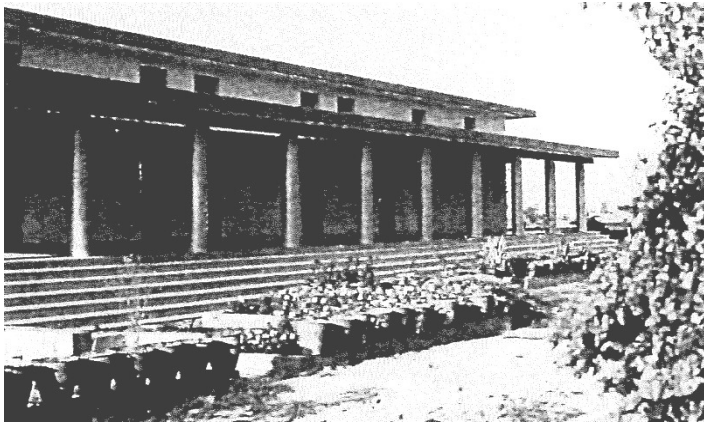
ここで釈尊に先立つ阿閃(アクショービヤ)、燃灯(ディーパンカラ)の2仏が過去に出現した事蹟に釈尊は習ったのだ、とする説もある。(大工原彌太郎記)



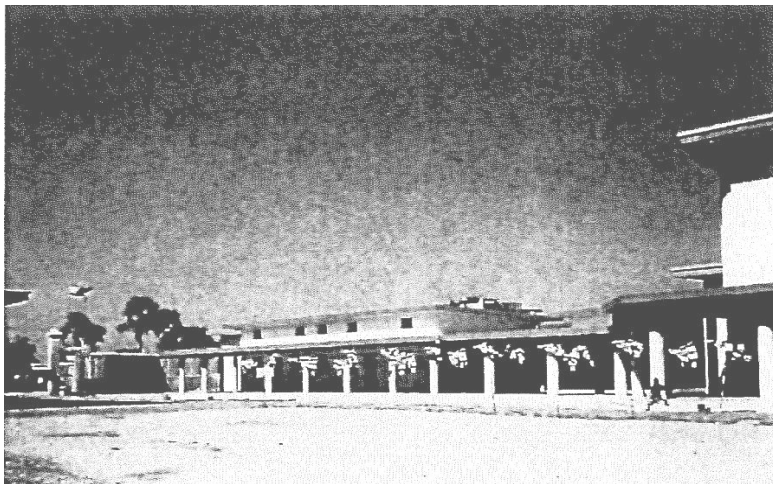
日本寺の大梵鐘は松下電器産業相談役、故・松下幸之助氏より寄進。



昭和 41 年 2 月、故・橋本凝胤師の御尽力でブッダガヤに宝篋印塔が落慶。現在は移転され日本寺境内にある。



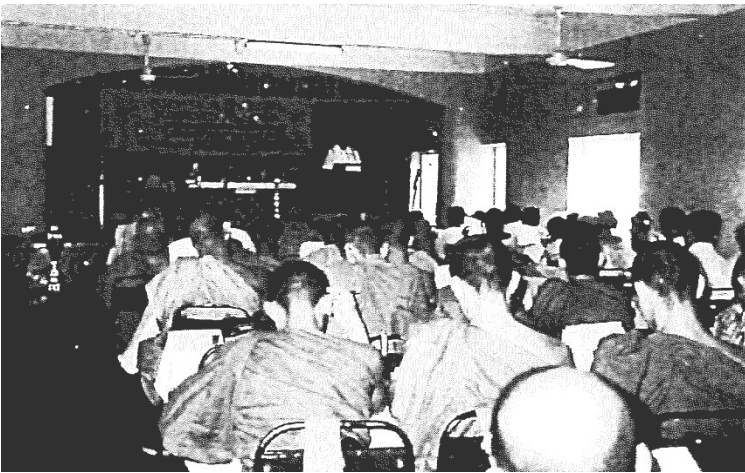
幼児教育(保育)施設(菩提樹学園)が(社)日本仏教保育協会の援助で創立された。



診療医療施設(光明施療院)を(社)全日本仏教婦人連盟の援助で開設。



一條智光・善光寺大本願法主による光明施療院扁額除幕法要。扁額は師の揮毫によるもの。



毎年インドまたは、スリランカで国際仏教徒結集が開催され、各国の学僧の参加がある。



(社) 日本仏教保育協会知事長上村映雄師を菩提樹学園の先生と園児が囲んでの記念撮影。



日本人医師による光明施療院でのボランティア診療風景(横浜市立大・杉田暉道教授)。1986年からWHO地域防疫拠点に指定され連日約200人の患者が診療を受ける。